

1. 研究開発課題

「英語で表現する力を育成するために、読むこと・聞くことにおける理解と定着を図り、

その内容を主体的・論理的に考えさせる指導法の実践的研究開発」

主体的とは？

生徒が、既に自分が持っている背景知識を用いて、自ら興味を持って文章を読んだり聞いたりし、概要を捉え、細部も正確に捉え、文字にない部分まで深く理解し、それに対する自分の意見を述べる。

論理的とは？

生徒が、パラグラフを意識して文章を理解し、考え、表現する。パラグラフの理解として、1年次に topic sentence, supporting sentences, conclusion という基本構成を、2年次に原因結果・具体例・比較対照・分類・意見主張といった基本展開法を、3年次にその他の展開法を扱う。

これまでも本校は、国際理解教育を推進する高等学校として、英語によるコミュニケーション能力の育成を目指した授業を展開してきました。国際教養科においては、平成15年度より SELHi 指定を受け、「英語の高次な実践的コミュニケーション能力を向上させるため、4領域（読む・書く・聞く・話す）を効果的・総合的に指導する方法の研究開発」という研究開発課題を設定し、実践的コミュニケーション能力を育成するための方策を研究してきました。研究の結果、論理的思考力・客観的思考力・4領域バランスのとれた英語力の習得に繋がる「ディベート力育成」と異文化理解・自国文化研究・地域交流活動というコミュニケーションの実践を通して獲得する「文化の理解力育成」に大きな成果をあげられました。

経済協力開発機構（OECD、本部パリ）が実施した「生徒の学習到達度調査」（PISA）によると、日本の高校1年生は、実施4分野のうち読解力が前回（2000年調査）の4位から8位に低下したとの結果が出ています。これを受け、文部科学省は読解力向上のためのプログラムをまとめました。学校では国語だけでなく、算数・数学や社会など幅広い教科を通じて「読む力」や「書く力」を養成し、新聞を授業で活用する「NIE」や「朝の読書」も充実させる（読売新聞、平成17年10月8日）というものです。

本校の生徒を見ても、「読むこと・聞くこと」の絶対量が不足しているため、表現する内容が伴わないことがあるように感じられます。さらには「書くこと・話すこと」の指導ももう少し体系的に行えば、生徒の思考力や表現力をもっと育成できると考えました。

そこで、「読むこと・聞くこと」の絶対量を増やし、表現力に結びつけるための指導体制や指導法を確立することが急務であると考え、表記のような研究開発課題を設定したのです。